

養護教諭の職務研究

——養護教諭を目指す学生につけたい力——

穴戸 洲美*

* 帝京短期大学 生活科学科

要 旨

教員の資質能力が大きく問われる時代に、短期大学での教員養成は非常に厳しいものがある。20歳前ではまだ人間的な成熟が不十分であるが、そのことも含めて教員として今日期待される力をつけていく必要がある。そこで、人間的な成熟を図りながら養護教諭としての力量をつける方法として、専門的な知識や技術と合わせて「観」を育てていくことを重視している。そのための授業方法の改善や、いくつかの方法を試みたので、その成果と課題について報告する。

キーワード：養護教諭学生、資質・能力、観

I はじめに

本学では、平成11年度から養護教諭養成をはじめ、今日で18年が経過した。現場で養護教諭として活躍する卒業生も年々増えてきている。

毎年実施している卒業生と在校生を対象にした卒業教育では、現場で数年経験した卒業生の実践報告もプログラムの中に入れてある。そこから見えてくるものは、授業を通して伝えてきた「養護教諭として大切にしたいこと（こども観や教育観）」が息づいていることを確認できる。

今日、若者の育ちそびれや幼さ、長引く思春期などが指摘され、自立を困難にしている。本学に入学してくる学生にもその傾向はみられ、最近では増加しているようにも感じる。養護教諭になりたいと希望してくる学生の中にも、お世話になった養護教諭をイメージして入学してくるが、「お世話になること」と「お世話をする事」との差には気付かず、入学後の学習を通して徐々に気付いていく。その差が大きいほど、自信を失い挫折していきやすい。従来の指導方法を踏襲しているだけでは、こうした学生にやる気を起こしたり、養護教諭として質のいい仕事ができる力をつけることはできない。

学生の入学時の実力を鑑みながら、数年前から、視写の教育¹⁾や、具体的な実践例から実践の中で重要なことは何かを理解していけるように、アクティブ・ラーニングを活用した授業展開（養護概説）などを試みてきた。その結果について報告する。

II 研究方法

1. 学生の入学方法と入学時の学力調査の分析から学生の基礎学力をつかむ。

平成27年～29年 3年間の養護教諭コース入学者

2. アクティブ・ラーニングを取り入れた「養護概説」の授業を実施し、実施後の授業評価から学生の主体的な学びや思考力に対する自己評価を分析する。また、実施後の自由記述から、学生の意欲や思考力、主体的な学びにつながる記述と、教師のコメントから資質や能力、観の育成につながるものを探る。

授業期間：平成29年4月～7月

授業評価表の記入：平成29年4月～7月

対象者：平成29年養護教諭コース入学者

3. 教職実践演習を中心に実習校での経験から学びを深めるためのグループ討議とプレゼンテーションの充実を図る。

III 倫理的配慮

学生には授業の中で、授業評価表の活用について了解を得た。また、学生の授業評価表の自由記述に対しては、個人が特定されないように氏名を削除し原文ではなく、内容を要約して記述した。

IV 結果

1. 学生の実態

(1) 養護教諭コースを選択する学生の実態

本学では、生活科学科専攻に入学した学生は入学後に生活文化コースか養護教諭コースかを選択する仕組みになっている。この両者は目指すものが全く異なっているため、最近ではほぼ入学前にどちらを選択するかは決めている学生が多い。養護教諭コースを選択した学生についてみると、選択した動機は異なる。一つは、養護教諭の職務をある程度理解していて、このような仕事がしてみたいと自ら決めてくる学生である。

この学生の中には、大きく分けると、自己の適性を理解したうえで選択するものと、保健室登校あるいは不登校などを経験し、養護教諭との関わりがかなりあり、自分もこんな仕事をしてみたいと憧れてくるものである。もう一つは親や教師に勧められたのでとりあえず選択してみようというものである。

これらの選択動機の違いは、養護教諭に必要な学習が始まると各々の学力や学びへの意欲をある程度ベースにしながら「どうしても養護教諭になりたい」というものと、「取りあえず資格だけとろう」というものの、「養護教諭がこんなに大変な学習をしなければならぬとは思わなかった。自分には出来そうにない」という方向に分かれてくる。

一方、教育実習の受け入れ条件が厳しくなる中で、実習に向けては「なりたいという意欲があり努力できるもの」「一定の学力やコミュニケーション能力などの社会性や、教師としての適性のあるもの」であることが問われる。

様々な動機で入学してきた学生に入学後約1年間で、これらの力を見極め教育実習に出すことになる。従って、なりたいという意欲をどうつけていくか、心理的な課題を持つ学生にはそれをどうクリアし、人と関わる力やコミュニケーション能力をつけてくかが課題になってくる。

(2) 入学方法と基礎学力

本学の入学選抜方法は、AO、指定校推薦、公募推薦、一般、社会人、センターなどの方法をとっている。

ここ3年間に養護教諭コースに入学したものの入学方法を年度ごとにまとめ図1に示した。

どのような入学方法を選択したかは年度によってばらつきがあるが、平均して指定校推薦による入学が一番多い。養護教諭になるためには採用試験を突破しなければならないことから、高校卒業程度の基礎学力が求められる。そこで、入学時に養護教諭を目指す学生に対して、高校卒業程度の一般教養試験を課している。ここ3年間の入学方法ごとの得点結果を図2に示した。

その結果を単純に比較して見ると、指定校推薦による入学者の得点が最も低く、センター入試者の得点が

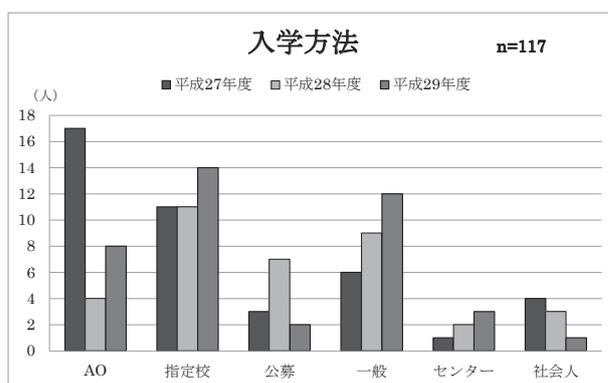


図1. 入学試験の方法

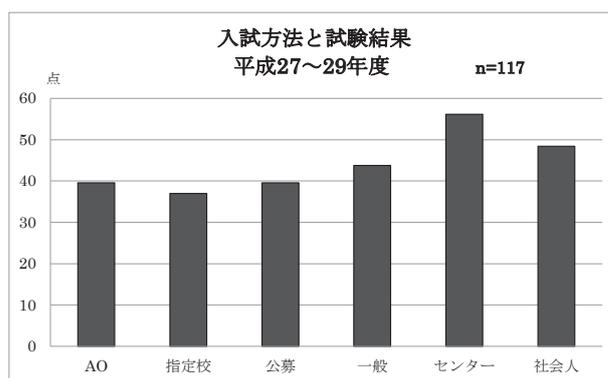


図2. 入学方法と試験結果

最も高い。さらに得点を具体的に見ていくと、平均点は全ての年度で100点満点の50点以下である。個別にみていくと、まれに70点、80点をとる学生もいるが10点代の学生もいる。こうした得点だけで学生の学力は測れないかもしれないが、入学後の成績とこの試験結果との関連は高い。

こうした学生に基本的には、養護教諭としての基礎的・基本的な力をつけ、採用試験を合格して養護教諭として教育現場に立たせることが望まれる。そのために、書く力、読み取る力、考える力と合わせて、学び方そのものを習得させていく必要がある。その中心になるのが授業である。入学後には、所謂基礎学力をつけるための科目はないので、専門科目の中でその力をつけていくことが必要である。数年前に始めた視写の教育もその一つの試みである。

2. これからの養護教諭に求められるもの～「チーム学校」の施策から

今日の子どもたちの健康問題は、複雑で多様化しさらに深刻さも増してきている。不登校の増加、いじめや自殺、児童虐待、アレルギーやアナフィラキシーショックなど学校教育の中でその対応が求められるものが多い。こうした中で、「チーム学校」²⁾の施策が打ち出された。

「チーム学校」の施策では、多様な専門性を持つ人

たちを学校教育の中で活用し、それぞれの職種の人たちが本来の専門性を発揮しながら子どもの教育に当たっていく方向を打ち出している。

長い間 教員が中心になって進めてきた学校教育は、今日の子どもの多くの課題に対応しきれないことや、オールマイティーのような日本の教員の仕事量の多さなどが問題になっている。その中で打ち出された「チーム学校」の施策は遅きに失した感もあるが、他職種と共に協働して仕事をしていくためには従来の学校教育の取り組み方とは発想を変える必要がある。中でも、「教育観」や「子ども観」を一致させ、同じ方向で子どもを導いていくという思想がないとうまくいかないのではないかな。

スクールカウンセラーが学校に導入された当初、教職員の一人としてどのように役割を果たしてもらおうのか戸惑った学校も多かった。カウンセラーの守秘義務を子どもの指導との間でどのように考えるのかとか、自然発生的には活用につながらない相談室とカウンセラーを、どのように子どもたちにつなぐのかなどの問題があった。

今日では、学校という場の独自性を生かしたカウンセラーの仕事の仕方も定着しつつあるが、未だに十分活用しきれていないとか、教員とカウンセラーの間に子どもをめぐる対立が生じているという報告も聞く。チーム学校がこうした二の舞にならないようにするには、それを動かしていくために核となる人がいて、お互いの専門性を発揮しつつも協働と連携を通して子どもの課題解決にあたる必要がある。校長などの管理職を頂点に、副校長・教頭、主幹、主任、一般教員という縦の系列で運営される今日の学校の中では、お互いの想いや考えが尊重され、公平で民主的な学校運営がなされないと子どもの課題さえ見えなくなる恐れがある。さらに、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、地域の関連機関等々、多くの人たちを巻き込んで課題解決をしていくためには、校長のリーダーシップは勿論であるが、具体的にコーディネートしていく人の力量も問われる。

一方で養護教諭はその職務の特質から、多くの職種の人たちや関係機関と連携・協働しながら子どもたちの健康問題を解決してきた。そのために様々な職種の人とつながり、コーディネーターとしての役割を果たすことも多かった。従って、チーム学校のような組織の中でどのように動いたらよいのかについてはある程度訓練された人も多い。

この施策の中で養護教諭に期待されていることは、いじめや自殺、不登校、虐待などの問題に対して、『教員とは異なる専門性にに基づき、心身の健康に課題のある児童生徒に対して指導を行っており、従来から

力を発揮していた健康面の指導だけでなく、生徒指導面でも大きな役割を担っている。』³⁾と述べている。

養護教諭は、これまでも健康面への指導と合わせて、様々な課題をもつ子どもたちに対しては担任等とも連携しながら生徒指導面（育てる）も視野に入れて実践的に取り組んできた。言い換えれば、養護教諭がすでに蓄積してきた役割が改めてここで確認され、期待につながったということもできる。

こうした期待に対して、仕事ができるような力は大学での養成レベルと現職教育の両面で考えていかなければならないが、養成レベルでできることはなにかを明らかにして大学教育に取り組んでいく必要がある。

3. 資質・能力と観を育てる

大学教育の中では、学生の知識理解や、一定の専門的な技術を身に付けさせることは勿論であるが、それらを子どもに向き合った時どう活かしていくかを考えたとき、大切なのがその学生のもつ人間性である。豊かな人間性とはどのようなものであるか。それは、資質・能力と観であると考ええる。

(1) 資質・能力と観

新しい学習指導要領では、子どもたちにどのような力を育むのかという教育目標を明確にし、それを広く社会と共有・連携していけるように「社会に開かれた教育課程」を実現するとしている。

そのために育てたい資質・能力の要素として次の三つを上げている。

- 1) 何を知っているか、何ができるか（個別の知識・技能）
- 2) 知っていること、できることをどう使うか（思考力・判断力・表現力）
- 3) どのように社会・世界と関わりより良い人生を過ごすか（学びに向かう力・人間性）

このことからいうと、資質・能力の基盤となるものは「知識や技能」であり、それを「有効に活用するための思考力や判断力、表現力」であり、「現実の社会の中で人と関わりながら自分らしく生きるためにどう生かしていくか意欲や人間性」ということである。このことは、学生にも言えることであり、学んだことを養護教諭としての実践の中でどのように生かすことができるかが問われる。

次に、「観」とは何か。

和田重弘はその著書『観を育てる』⁴⁾のなかで次のように述べている。『カンには三つのカンがある。一つは「感＝感覚器を通して感じる能力」で0歳～3歳ぐらいの間までに養育される人や環境との関係の中で育っていく。その上に立って二つ目のカンは「勘＝抽象的なものを瞬時に具体化する力」で自然とのかかわ

り中でつけていく動物的な勘で9歳ぐらいまでに自由な遊びを通して育つもの。三つ目のカンは「観=行き詰らない力」であり、見通しが聞くとか、先が読めるとか、周囲の状況がわかるような力であり、14-15歳になって、自分とは何かを考えられるころから一生にわたり育つもの』⁴⁾と述べている。

これらの育ちが不十分なことから、子どもたちが思春期に行き詰まり不登校や引きこもりという現象を起こす。このカンの育て直しが必要であり、そのために和田氏は子どもたちに寄宿生活を通して、自然とふれあい、仲間とふれあい「観」を育てて行く取り組みをしている。

私自身は、「観」とは「ものの見方」や「考え方」の根底をなすものであり、現実の社会に起きる様々な現象をどのように観て、そのことに対して自分はどうか考え行動するかという力と捉えている。従って「子ども観」とか「教育観」とか「社会観」というようなところでその人自身の見方や考え方がでる。そして、この「観」は、その人の持つ資質・能力をベースにして学習することによって育つものではないか。

養護教諭としての「観」を育てるという場合は、目の前の子どもの問題の見方や捉えかた、解決のための行動力、行動を磨くということである。子どもの問題を解決するためにはこの見方が一致しないと、言い換えれば「子ども観」や「教育観」が一致しないと、連携や協働が図りにくくなる。

和田の「観」のとらえ方と一見異なっているように思うが、矛盾するものではないと考える。子どもたちの問題を解決するに当たり、この対応が、子どもの将来にどのような影響を与えるのか。また、この対応について、子どもを取り巻く周囲の人々がどのように認識し、協働者となりえるかどうかなど、常に考えながら見通しを持って自己の実践を展開していくことが必要である。

また、和田のいう14-15歳から一生にわたり育っていくものであるという指摘は学生の変化を見ている実感できる。従って、この「観」を学生にどう育てて行くかが、拙者の課題としてきたところである。

(2) 養護教諭に育てたい資質・能力と観

養護教諭は、子どもたちに直接かかわり、多かれ少なかれ子どもたちにその関わり方が影響する。特に、今日的課題として挙げられているものには、不登校やいじめ、自殺、虐待などの深刻な問題がある。また、生活リズムの崩れや発育・発達上のからだの歪みなどもある。このような問題に直面したとき、その子どもを、あるいはその子どもの問題をどのように捉えるか。その捉え方によって、その後の関わり方や、問題の解決に向けての行動の仕方も異なってくる。そし

て、それは一人一人の養護教諭の資質・能力と観に左右される。

教育実習から帰ってきた学生に課題に向き合わせるために(教職実践演習を中心に)、実習先での様々な体験を出し合い議論させる。

例えば「保健室登校は受け入れない」「保健室で休む時間は1時間以内。1時間経ったら教室に戻るか、家に帰るかを選択させる」「保健室に来る前に、必ず担任の許可を得てくる」などは、多くの学校で今も続いている。

これらのことに対して、学生がどのように感じ、理解し「自分だったらどう対応するか」を考えさせるために議論させたり、考えさせたりする。例えば、「保健室で休めるのは1時間」という決まりについてどう考えるか。

ある学生は「その決まりがないと、子どもたちがたくさん来て、本当に利用したい子どもたちが利用できなくなるからやむを得ない。」とか、「保健室で休ませると、勉強したくない子は1日中保健室にいるようになってしまう。」などと答える。また、ある学生は「そう思うけど、それで次の日から来なくなってしまう生徒もいる。」と考えを逡巡させる。この思考の逡巡が重要である。さらに考えを深めるために「本当に利用したい子どもとは?」「保健室で休んでいた子どもの中には本当に利用したい子どもはいないのか?」などと投げかける。

それを受けて、さらに学生は考える。「もし、先生に話したいことがあってなかなか言い出せず、言い出すまでに時間がかかったり、先生が忙しそうで話しかけられず、ベッドの中で悶々としているうちに1時間経ってしまうこともあるかもしれない」など、いろいろな事例を想定して議論が深まっていく。

「1時間という規則がなかったら、勉強したくない子は1日中保健室にいることになってしまうのではないか。」という危惧に対しても、実際にそういう場面に遭遇してというより、一般論としてそうなるだろうという予測である。ここに、子どもとはそういうものだろうという「子ども観」があるからである。そうした子どもがいることも否定はしないが、そこから子どもたちの生活背景まで深くつかみ、子どもの置かれている状況や気持ちなども考えながら、この「子どもが自立していくために必要な支援は何か」という視点で子ども理解を深めていく力をもたないと、今日の子どもの問題は解決できない。

規則や規律はどこでも必要であるが、その規則や規律が現実に目の前にいる子どもにとってどのような意味があるのかを考え、深い気付きができるかどうかは、その人の資質・能力と、「子ども観」や「教育

観」に影響される。学生に対して深く考えさせる発問を繰り返すと、しばしば行き詰るが、次第に思考を深めていき、その子どもの問題にどう向き合うかを考える。その中で、子どもの自立という教育の目的を考え、「今この子どもに必要な対応は何か」を見極めていくことができるような力をつけていくことが必要である。それが仕事の質や観につながる。

実習校訪問の中でも、養護教諭の仕事の仕方にばらつきがあることはやむを得ないところであるが、学生の学びの場所として有効に機能させるためには、学生自身に自己の「子ども観」や「教育観」をしっかりとらせる必要がある。実習校で遭遇したことに対し、時にはその学校の養護教諭を反面教師として捉え、自分が養護教諭になったらどのように対応するかなど、主体的に考える力をもてることが重要である。

かなり以前の事例であるが、実習校の中に「保健室は子どもをそこに留めてはいけない。教室にいかに戻すかが養護教諭の力量である」という管理職の指導に基づいて実習をしてきた学生がいる。この対応に疑問を抱いた学生がいたが、こうした、疑問を抱けるような力を育てたい。「子ども観」は一つではないが、今日の子どもの課題を考えると「子どもの可能性を信じて、子どもに働きかけその育ちを待つ。」という「子ども観」を持てるようになって欲しい。この「待つ」ということの大切さは先の和田氏の実践の中にも出てくるが、こうした気づきや思考をどう育てて行くかが大切だと考える。

(3) 授業実践に対する学生評価を通して「観を」育てる試み

本学の学生のこれまでの授業評価を見ていると、自己の学習に向き合う意欲や態度の評価が低く、課題を出してもやらないで次の授業に参加する。自分で主体的に考えるということも弱い。この部分を改善するために、課題を出した後の課題の取り上げ方を工夫してきたが、なかなか改善されないという悩みを持っていた。

これまでは、課題を提出させ、一人一人に評価を返していた。出さない学生に対しては個別指導をしたり、書き方の支援などをしてきたが学生は受動的であった。

現在は、主体的な学びを引き出すために、毎回課題を出しその課題に対してできるだけグループでのディスカッションと、その結果をまとめて発表しお互いの見方や考え方の違いに気づき、学びを共有していく。その過程でさらに自己の思考を深めていく。このことを狙って、授業の約6割にアクティブ・ラーニングの手法を取り入れた。確かに全員が課題をやってくるわけではないが、3～4人のグループでディスカッ

ションをすることにより、課題をやっていない学生も巻き込まれ、自分の思考力を働かせる。発表にも、全員が話すことを課すと次第に参加するようになった。学生に書かせた授業の評価表を表1に示した。

大学が実施している私の授業評価では、「主体的に学習する意欲」に関する項目は5段階評価で4.0以下であり、他の評価項目が4.0以上であることと比較しても低かった。今回のアンケートでは項目も評価基準も異なるので、一概に比較はできないが学生の意欲や態度を「自分が考える時間を持てた」「自分の意見を発表したいと思った」「課題レポートが授業理解に役立った」「1週間のうち、この授業に関する学習をした」などの項目で見ることができる。14回の平均得点を図3に示したが、これらは4段階評価の3.0以上であり、概ね可とできる(図3)。

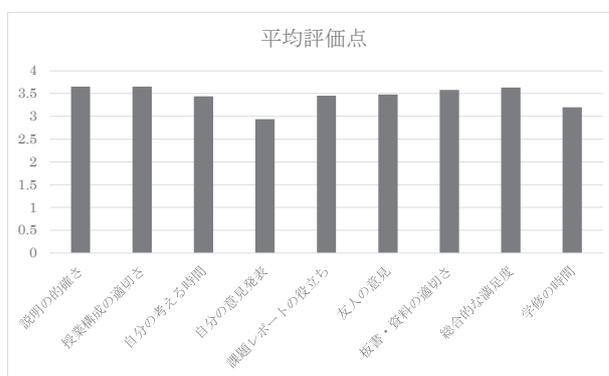


図3. 授業評価の平均得点

さらに、学生の「資質・能力・観」を育てる試みとしては、毎回自由記述を取り、その中で必ず考えを受け止めたり、深めたりすることができるようにするためにコメントを書いて返している。このコメントは、学生の思考を深めたり、良い点を評価し自信をつけさせたりすると同時に、授業者の想いがどれだけ学生に伝わっているかを評価する材料にしている。

学生の記述の一部を要約したものと、それに対するコメントの一部を表2に示した。

「(養護教諭)をやりたいという思いが強くなった」「自分で考える時間があった」「同じ教科書を読んでも自分とは異なる理解をする人がいることが分かった」「自分が養護教諭になったらどう行動するか考えイメージしてみた」「(自分が)発言する時間があったって良かった」「何が求められているか理解するためにもっと勉強しようと思った」「(養護教諭)の今日的役割を深く考えることが出来た」など、従来の授業方法では出てこなかった学生の意欲や思考を引き出すことができた。

中には「授業がよく理解できなかった」「課題をやったけどできなかったので、討論への参加が十分にできな

表1. 授業評価

授業担当者名： 宍戸 洲美

| 授業科目名 | 養護実習指導 | 回答欄 | | | |
|-------------------------|--------|------|------|--------|----------|
| | | 強く思う | そう思う | そう思わない | 全くそう思わない |
| 開講時期 | 1年前期 | | | | |
| 学生番号氏名 | | | | | |
| 授業実施日 | 月 日 | | | | |
| 備考 | | | | | |
| 1 教員の説明は的確であった | | | | | |
| 2 授業の構成は適切であった | | | | | |
| 3 自分なりの考える時間が持てた | | | | | |
| 4 自分の意見を発言したいと思った | | | | | |
| 5 課題(レポート)は本時の理解に役立った | | | | | |
| 6 友達の意見は参考になった | | | | | |
| 7 板書や資料等は適切であった | | | | | |
| 8 総合的に満足できる授業であった | | | | | |
| 9 1週間のうち、この授業に関する学修をした。 | | | | | |

今日の授業の良かった点・悪かった点

担当者への質問・要望

表2. 授業評価：授業記述

自由記述と教員のコメント

| 授業テーマと進め方 | 自由記述(感想・意見) | 教員のコメント |
|---|---|--|
| 1回目 講義：養護教諭の養護とは | <ul style="list-style-type: none"> ・養護教諭に対する期待が理解でき、やりたいという思いが強くなった ・受動的に聞くだけでなく自分で思考する機会が多く与えられてよかった ・例を挙げた説明が多かったので考えやすく正解を学べた ・考える時間があつたのでわかりやすい授業だった ・経験したことの話を、自分ならどうするかと問いかけてくれてよかった ・人間理解のところがすごい勉強になった ・実例が出たので、自分が養護教諭ならどう行動するか考えイメージすることにより実感を伴って学習できた。 | <ul style="list-style-type: none"> ・期待に応えられるよう学びをふかめていってください ・自分で考えることはとても大切です。今後も自分の頭でしっかり考えてください ・正解がはっきり出る場合と出ない場合があるので、どう考えるかを訓練しましょう ・実例はできるだけ話をしていくので自分でも考える習慣をつけましょう これまでの人間理解と異なりましたか ・これからもどんどん考えながら学習を蓄積していってください。 |
| 2回目 課題を受けてのグループ討議と発表 テーマ：養護教諭の専門性とは | <ul style="list-style-type: none"> ・同じ教科書でも人によって理解が違い面白かった ・講義だけでなくグループ討議、発表が面白い ・小倉による専門性の追求をもっと詳しくやってほしい ・発言する機会があり良かった ・先生の説明を聞いてより考えが具体化でき理解が深まった | <ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな考え方や見方があるので学びの共有は大切です。 ・まとめはしますが、自分の関心があることを自分で追求してみるといいですね ・自分の考えを言葉で表現することは大切です |
| 3回目 養護教諭の歴史と発展過程 | <ul style="list-style-type: none"> ・歴史がよく分かった。・何が求められているか理解するためにもっと勉強しようと思った ・自立について周りの意見も聞け、自分で判断して伝えることが大切と分かった ・養護教諭の歴史や現在の理想像を知ることができた。・そうなれるように学んでいきたい ・友達の発表で色々な考えがあつて面白かった ・歴史は苦手だけど分かりやすかった。・創造していく力を身につけていきたいと思う。 ・養護教諭は自分で問題を見つけ、解決するために行動する力が必要で、難しいと思った ・社会的背景によって求めているものが変わることが分かった ・健康が良い社会に繋がると感じた | <ul style="list-style-type: none"> ・ぜひ自分でも調べてきてください。 ・“自分で判断すること”がとても大切です。 ・いろいろな養護教諭の実践に触れ自己の養護教諭像ができるといいですね ・お互いに学びあう経験をこれからもしていきたい ・創造していく力のもとになるのは何だと思えますか ・少しずつ学びを深めていきましょう ・これからは何を求められているのか考えていってください |
| 4回目 保健室の機能と養護教諭の役割 1 | <ul style="list-style-type: none"> ・子供たちが利用しやすい保健室を作りたいと思った ・色々な保健室の先生がいることが分かった ・養護教諭によって保健室が変わることが分かった ・保健室は何のためにあるのか考えさせられた ・教育を大切にしていきたいと思った ・保健室について改めて考えられた ・しっかりした養護教諭になりたい | <ul style="list-style-type: none"> ・そのために大切なことは何か考えましょう ・あなたが出会った先生はどうでしたか？ ・授業を受けて、いっぱい考えてください ・いいですね。そのためにしっかり学んでください |
| 5回目 保健室の機能と養護教諭の役割 2 | <ul style="list-style-type: none"> ・子供たちが保健室に何を求めているか考えさせられた ・日々勉強したい ・教科書に書いてない話が聞けて良かった ・具体的機能が健康問題とともに変化することがわかった ・今日的役割を深く考えることができた ・問題を子供の生活に繋げていくことの重要性がわかった ・今の社会の問題を深く考えることが出来た ・SNS問題について考えられた | <ul style="list-style-type: none"> ・しっかり考えて自分なりの保健室づくりをイメージしてください ・できるだけ、事例を話していきます ・子どもの健康問題と保健室の機能は深くつながっています ・子どもの問題の背景には生活が関係していることが多いです ・社会のことを深くつかむことも大切です |

* 下線は育てたい力として注目した部分

かった次は頑張る」などの意見もある。今回は、15回分の自由記述の一部だけしか分析できていないが、授業方法を改善することにより、学生の主体的参加を促し、「ものの見方」や「考え方」を鍛えることができるという手ごたえはあった。また、考えを引き出すことはできたが、それをさらに発展させ「物事を表面的にだけ見ないで深く読み取り理解していく力」をつける必要がある。

ものの見方や考え方を深めていく中で、所謂「観」を磨くことが出来る。そのためにはできるだけ実例やそれに対するいくつかの実践事例を紹介することで、「何を大切にしたらよいか」を学生自身が考えるようになる。

この蓄積をもとに教育実習に向わせることで、さらに思考を深めさせたい。学習を始めたばかりの学生は、初めは受け身であることも多いが、徐々に思考を深めていく学生もいる。養護教諭として必要な資質や能力と合わせて、子どもの立場に立って深く考えることができる「観」を育てたい。その中核になるものは授業からの学びであり、どのように豊かな授業実践ができるかは教員の資質・能力と「観」にも影響されるので、教員自身も自己に磨きをかけていくことが必要である。

V まとめと今後の課題

急激な社会変化の中で、学校においても多くの課題があり様々な教育改革が行われているが、子どものいじめや自殺、不登校、虐待などは一向に減らない。また、学校そのものがこれらの問題と深く関わっており、子どもたちにとって必ずしも安心・安全な場所にはなりえていない。それ故、学校の中であって保健室・養護教諭は、教室や担任とは異なる空間や役割を持つ。ここに期待を持つ子どもや親も多い。子どもたち一人一人を丁寧に受け止め、ケアと教育を保障できる保健室・養護教諭であることが求められている。

チーム学校という大きな改革が打ち出されているが、果たしてこの施策が子どもたちにとって、どのような効果をもたらすのかはまだ未知数である。子どもは多くの発達課題をもったまま、育てる視点ではなく管理を強化し従わせる視点で教育が展開されるとすればつぶれるしかない。養護教諭は、社会状況や学校教育全体をどのように観て、まずは、子どもの立場に立ちきることである。その中で子どもが自立していくためにはどのような力をつけることが必要か、そのためにどのような方法があるかを見定め、必要なことを実践する力がある。こうした養護教諭の資質・能力や観を育てるのは、養成教育の中でも重要なことである。

今回は授業方法の改善を通して学生の育ちを試みたが、以前から実施している視写の教育も有効であり専攻科の学生を中心に継続している。しかし、15回の授業の中で今回試みた授業方法を取り入れると、時間が足りない。一定の知識や技術も修得させる必要があり、その点が不十分になってしまうきらいもある。その部分を、関連する教科や演習等で補っているが、授業以外の手段を工夫していく必要もある。2年間の中で専門的な知識理解を深めるために基礎学力をつける必要もある。授業方法の改善と合わせて今後も、学生を育てるあらゆる機会を通して様々な実践を試みていきたい。

文献

- 1) 穴戸洲美 学生の学びを深めるための一手法——視写の教育を通して—— 帝京短期大学紀要, 19, 35-40, (2016年)
- 2) 文部科学省 チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について(答申)【骨子】文部科学省(2016年)
- 3) 文部科学省 現代的健康課題を抱える子供たちへの支援——養護教諭の役割を中止として—— 文部科学省(2017年)
- 4) 和田重宏 「観」を育てる——行きづまらない教育のために 地湧社(1997年)

Duties Research of Yogo Teacher: Key Skills to Instill in Aspiring Yogo Teacher

Sumi SHISHIDO *

* Department of Living Science, Teikyo Junior College

Abstract

As qualifications and skills of teachers receive more scrutiny, teacher training at two-year junior colleges faces a greater challenge. At the age of around 20, many students have not yet fully matured as adult; yet they must acquire the skills needed to serve as a teacher. In addition to teaching field-specific knowledge and skills, we place an emphasis on nurturing each student's "perspective" on children as a method to allow students to mature and to acquire proficiency as a school nurse at the same time. This research details our efforts to improve our instructional methods, what we have accomplished, and the remaining challenges.

Keywords : Yogo teacher trainees, qualification, perspective

